



紙の表と裏にインタラクティブな関係を 佐野研二郎

ポスターは明解なメッセージを届けるための手紙。

そこで、プロダクトブランド「nico」の商品広告としてユーモアを印刷技術で内包してみたくなった。

厚み0.1mm以下の薄紙を立体として考え、表面と裏面の両方が互いに影響し合う、

表裏一体かつ独立した関係をデザインしてみることにした。



用紙：はまゆう 四六判 43kg

版の構成：【表面】プロセス4色（広演色プロセスインキ「Kaleido」※以降Kaleidoと表記）/【裏面】銀→プロセス4色（Kaleido） ※表面から透かした状態



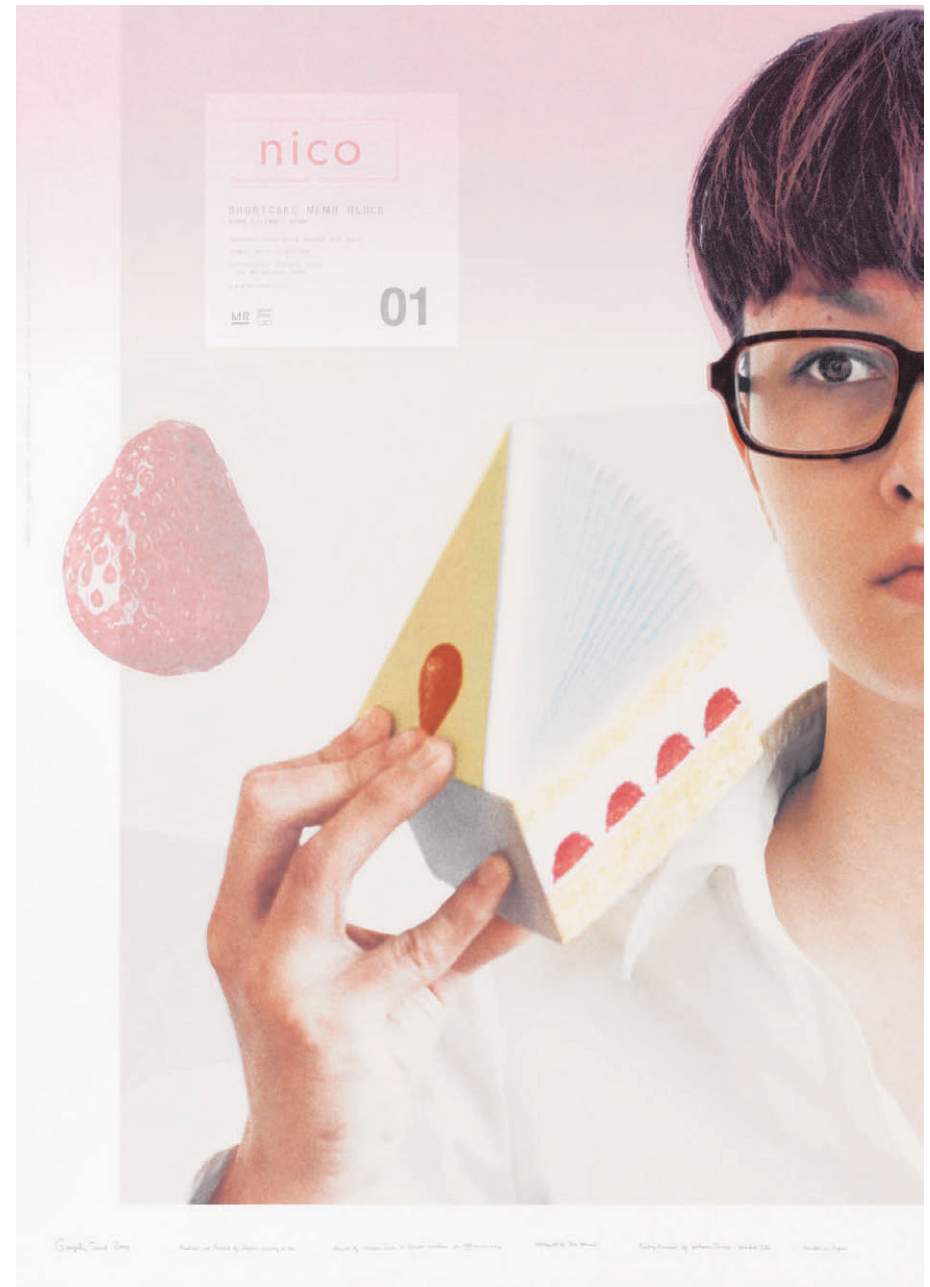
用紙：はまゆう 四六判 43kg
 版の構成：【表面】プロセス4色 (Kaleido) / 【裏面】銀→プロセス4色 (Kaleido) ※表面から透かした状態



用紙：はまゆう 四六判 43kg
 版の構成：【表面】プロセス4色 (Kaleido) / 【裏面】銀→プロセス4色 (Kaleido) ※表面から透かした状態



用紙：はまゆう 四六判 43kg
 版の構成：【表面】プロセス4色 (Kaleido) / 【裏面】銀→プロセス4色 (Kaleido) ※表面から透かした状態

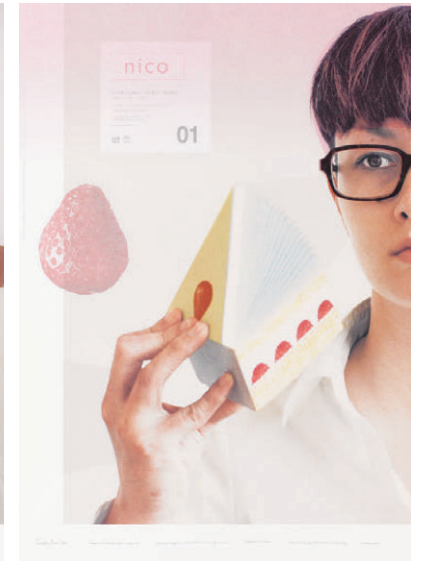


用紙：はまゆう 四六判 43kg
 版の構成：【表面】プロセス4色 (Kaleido) / 【裏面】銀→プロセス4色 (Kaleido) ※表面から透かした状態

FINISH

表面（上段）と裏面（下段）

※それぞれの面から透かした状態



Art Direction : 佐野研二郎 / Design : 村上雅士 (MR_DESIGN) / Photograph : 間部百合

ABOUT TRIAL

トライアルについて

●トライアルの背景

ここ数年「物事を明解に伝える上で、細かなことに頼ってはならない」と、キャラクターやアイコンによるミニマムな表現にシフトしています。「LISMO!」や「資生堂ザ・カラーゲン」の仕事も全てそうです。俯瞰して物事を捉えないと強いコミュニケーションはできないのではないかと、デザインの目的を装飾ではなく機能や効果であるとして取り組んできました。そういう意味で僕はかなりドライな考え方でデザインと接してきた方だと思います。もちろん細部の集積も大切だし印刷に対する熱い思いもあるけれど、極論すれば白黒で記号的な表現に規制すれば、デザイナーはより厳しい目で全体のトーンやコンテンツを吟味するようになると、あえて自ら制約を課してきました。ただ、技術を味方とすることで表現の振れ幅がもっと広がるかもしれないと、次の可能性を見つけるべく参加してみることにしたんです。

●制作コンセプト

ポスターは本来、伝えたい言葉を明解に伝えるための手紙。そこで、僕のプロダクトブランド「nico」の商品ポスターをつくることにしました。メモブロックという当り前にあるものに、ショートケーキや角材という日常のモチーフを与えるとまったく新しい物質が生まれる瞬間がある。そんな「A+B」が「C」となるような、生活にユーモアを加えて新鮮な価値を届けていくプロダクトブランドなんです。

商品の一つであるメモブロックは紙が集積した立体物です。一見シンプルに見えますが、側面印刷などの高度な印刷技術を駆使しているプロダクトですから、今回のポスターも紙を0.1mm以下の厚みをもった立体としてとらえてみました。印刷が透ける「裏写り」は印刷業界では通常避けることですが、それを逆手に



とって表も裏も「表面」として独立していながらお互いに関係しあって成立している「立体的な」ポスターを目指してみました。写真中心で見せるA面と、タイポグラフィや銀の色面中心のB面とに役割を振り分けつつ、一部の絵柄の関係性を逆転させてそれぞれ補完しあう表裏一体を意識したものにしています。

●トライアルのプロセス

画面上と実際の印刷がまるで変わらなくなっている最近では、完成が正確にイメージできるメリットがある反面、どうなるのか!? というトキメキがない寂しさもあります。やはり想像の範疇のものには心が動かないものです。画面上で完結しない手と目を使った工芸的なことに挑戦したい。ただ、実験が実験で終わるのではなく、一枚のポスターとして成立させたい。今回は実験という性格上、トライアルしながらプランを練り、浮かんだアイデアをすばやく定着し、また修正していくという流れとなりました。印刷でどんなことができるのかとプリンティングディレクターに投げかけて、またそこから発想するという贅沢なプロセスは、美大生に戻ったようにわくわくする機会となりました。

——佐野研二郎

TRIAL PROCESS

トライアルプロセス

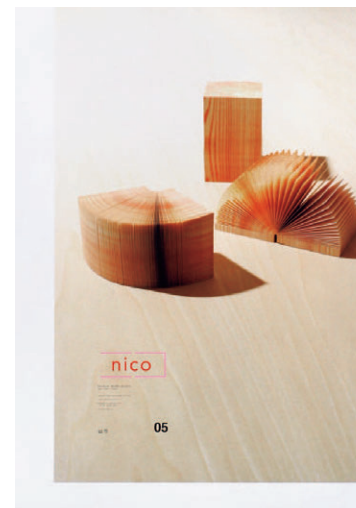
佐野研二郎 × 十文字義美・都甲美博(PD)

製版で写真に強さを与える

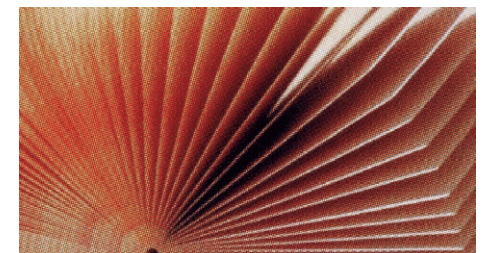
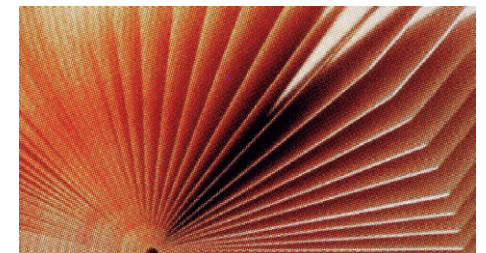
淡い色調の写真を、印刷によっておおらかなのに知的かつユーモアのあるものとした。例えば、「全体として弱くて優しい雰囲気だが色のコントラストはくっきりとしている」「印象づけたい商品のビジュアルだけが不思議と強く見える」というもの。



写真原稿



線数：300線 / 版の構成：プロセス4色 (Kaleido)
製版はライト部を強調して、中間部分からシャドウ部分にかけてボリュームをアップさせるとともに、メリハリ、コントラストをつけた。

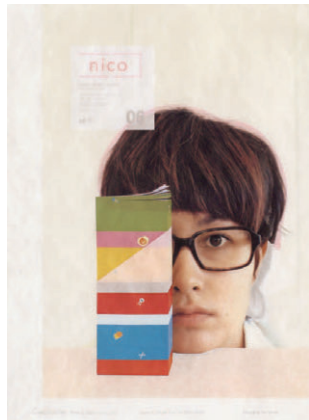


上から、線数：300線 / 版の構成：プロセス4色 (Kaleido)
線数：300線 / 版の構成：プロセス4色 (ノーマル)
線数：65線相当 / 版の構成：プロセス4色 (Kaleido)
線数：65線相当 / 版の構成：プロセス4色 (ノーマル)

表と裏のインタラクティブな表現を

ポスターを立体的に考える。ポスターのテーマとしたプロダクトも技術で面白さを付加したもので、このポスターも技術を使って「立体的な」ものにしていくことを試みた。写真表現はとてきれいな仕上がりがりだったので、今度はこれを表裏それぞれから見ても透かして見ても面白い、というものを目指した。通常の4色印刷だが、表裏が影響し合い、さらに豊かな表現ができるように試みた。

表面



裏面



用紙：はまゆう 四六判43kg(ザラ面)
線数：65線相当
版の構成：プロセス4色 (Kaleido)
表面の紙地を残した部分に、4色で刷った裏面の色がうっすらと効果的に透けて見える。

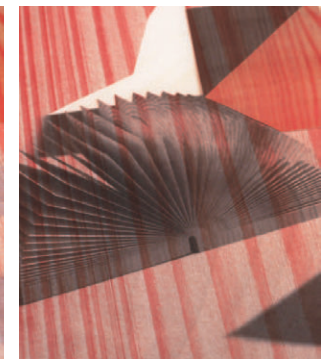
用紙：はまゆう 四六判43kg(艶面)
線数：175線
版の構成：銀→プロセス4色 (Kaleido)
裏面に刷った銀の下から表面の4色が透けて、メタリックなカラーとなって現れている。

用紙：はまゆう 四六判43kg(艶面)
線数：175線
版の構成：プロセス4色 (Kaleido)
モノクロでありながらうっすらと裏面の4色が透けて、深みのあるモノクロ表現となっている。

表面



裏面



用紙：はまゆう 四六判43kg(ザラ面)
線数：65線相当
版の構成：プロセス4色 (Kaleido)
表面のメモブロックと裏面の絵柄が紙一枚の厚みを挟むことで、立体感や奥行き感が増幅する。

用紙：はまゆう 四六判43kg(艶面)
線数：175線
版の構成：銀→プロセス4色 (Kaleido)
不透明インキの銀の質感に上から刷った4色が重なり不思議な風合いを生み出している。

用紙：はまゆう 四六判43kg(艶面)
線数：175線
版の構成：プロセス4色 (Kaleido)
モノクロの絵柄の上に4色の絵柄がのることで同一面上で奥行きがでている。

紙の“透け効果”をさらに極める

表裏印刷で想像以上の効果を得られたので、今度は紙の透け効果をさらに活かすための製版を試みた。絵柄同様、製版でも表面と裏面に差をつけて、それぞれの面で役割を振り分けて表裏で補完しあう製版を狙った。表裏の組み合わせを線数や製版のコントラストを変えて実験することで、透け効果をより生かすことを目指した。

表面



用紙：はまゆう 四六判43kg(ザラ面)
線数：【上】300線 / 【下】フェアドット
版の構成：プロセス4色 (Kaleido)
上はノーマルに、下はかなり硬調(ハイコントラスト)に製版したものの。
上下ともに、スクリーン線数を30線相当の粗線にしたものも試した。

裏面



用紙：はまゆう 四六判43kg(艶面)
線数：【上】300線 / 【下】フェアドット
版の構成：銀→プロセス4色 (Kaleido)
上はノーマルに、下は中間のボリュームを上げて軟調に製版したものの。
上下ともに、スクリーン線数を30線相当の粗線にしたものも試した。

●トライアルを終えて

プレゼンテーションが不可欠な仕事柄、僕はビジュアルを言語化することを最重視しています。だから「なんかカッコいい」では決して済まらずに、言葉で明解に説明する習慣があります。ところが今回、完成したポスターを眺めながら「魅力はどこか」と考えてみると、いい意味で非常に多様に曖昧な部分が多いんです。「薄い紙なのに立体的なところがいい」「レイヤー効果で色に伸び寂びがある」など、要素はたくさん挙げられても一言で明語化するのには難しい。でも、間違いなく魅力があるのはわかる。明確な記号性をもっていなくても十分に伝わるものだと、改めて再確認すると同時に言語化できない魅力が存在することも実感できた。やはりビジュアルは言葉を超えていくのかもしれない。

今回のトライアルでは、砂目や網点を操作することで、素材となった写真から予測できなかった効果を生みました。プリンティングディレクターとセッションしていくことで、その結果、僕とポスターの間にほどよい距離感ができ、自分でデザインしつつ自分のものではなくなった。モノとしての独立独歩感をとても頼もしく思っています。

完成したポスターはシンプルながら、両面印刷を通じて薄い紙のなかにはっきり空間性がある、平面を超えた「立体」となりました。「nico」プロダクトとしてのユニークネスもしっかり伝達できていますし、広告デザインとしても成立したものになりました。たくさんの技術を内包しつつ、本来の目的でもあるポスターの王道らしい堂々とした佇まいもある。やや自画自賛すぎかもしれませんがね(笑)。でも次への指針となるものになったのは確かです。

——佐野研二郎



●プリンティングディレクターから

我々の仕事は一言でいえば印刷のトータルディレクションです。デザイナーの要望を受けて用紙やインキ、線数の提案などの品質設計をし、製版設計書をつくって製版現場に流して、できるだけいい校正を出校する。さらに印刷では校了紙よりさらによいものを納品できるように現場に立ち会います。製版から印刷までの複雑な工程を串差しにして見届けるという、ちょっと特殊な仕事です。

今回は佐野さんがはっきりとイメージを持っていて、それを明快に伝えてくれたので、思った以上にすんなり運びました。裏写りの効果を狙うということで、クリアな発色のインキを選び、製版を超ハイコントラストにして線数を工夫し、校正刷りではインキの盛りの強弱を加減しています。特別なことをするというより、イメージをちゃんと生かすために印刷技術のノウハウを発揮させていただきました。

でも、何よりの収穫は、佐野さんと出会えたことだと思っています。明るくて、いつも物事を前向きにとらえる姿勢がとても素晴らしいと思いました。楽しく仕事をさせていただき、ありがとうございました。

——十文字義美・都甲美博